解説

ティーチング・ポートフォリオとラーニング・ポートフォリオ
―佐賀大学の取り組み―

応般

皆本晃弥
佐賀大学

ポートフォリオとは

ここ数年，大学教育においてティーチング・ポートフォリオ（以下，TP と略記）やラーニング・ポートフォリオ（以下，LP と略記）といった用語を耳にするようになった．もともとポートフォリオとは，画家や建築家などが自分の作品を綴じ込むのに使っていた「紙バサミ」のことである．彼らは自分を売り込むために，良い作品を厳選して，それらを紙バサミに綴じて持ち歩き，買い手に見せていたことであろう．そういう意味では，ポートフォリオとは「厳選された作品集」といえる．

日本でこの TP や LP が特に注目を浴びるようになったのは，中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）でこれらの用語が登場してからである．この答申では，TP が「教育改善に向けたさまざまな努力や成果を適切に評価する観点」として，LP が学習成果を「多面的に評価する仕組み」として登場しており，「評価」を意識していることが窺える．しかし，どうしても「評価」となると，教員も学生も身構えてしまう．そこで，本稿では「評価」という観点にあえて触れず，佐賀大学の取り組みを中心に，TP と LP について解説したい．

ティーチング・ポートフォリオ

❏ 日本における TP の現状

TP とは「自らの教育活動について振り返り，自らの言葉で記し，多様な根拠資料によってこれらの記述を裏付けた教育業績についての厳選された記録」である[1]．通常，TP を作成する教員（メンティーと呼ぶ）は，2 泊 3 日で行われる TP 作成ワークショップ（以下，TPWS と略記）に参加し，メンターと呼ばれる TP 作成支援者との対話（メンタリング）を通して，TP を作成する．もともとアメリカ直輸入型 TPWS は 3 泊 4 日だが，これをもとに 2 泊 3 日の日本型 TPWS が開発され，2008 年 8 月に大学評価・学位授与において日本で初めて実施された．佐賀大学では，この日本型 TPWS に基づいて 2009 年 9 月から 2011 年度末までに TPWS を計 6 回開催し，学内教員 25 名，学外教員 11 名が TP を作成している☆1．2011 年 10 月時点で全国において 12 機関 249 名の教員が TP を作成しているとのことである[2]．

❏ TP の構成と作成の重要点

TP は，A4 サイズで 8 ～ 10 ページの本文編とそれを裏付ける根拠資料からなり，本文編は以下の主要 5 項目や教育改善への取り組みなどから構成される．

1. 教育の責任（何をしているのか？）
2. 教育の理念（なぜやっているのか？）
3. 教育の方法（どのようにやっているのか？）
4. 教育の成果（その結果どうだったか？）
5. 今後の目標（今後どうするのか？）

☆1 作成された TP の多くは以下の旧佐賀大学高等教育開発センターの Web ページ（http://www.crdhe.saga-u.ac.jp/portfolio.html）で公開している．

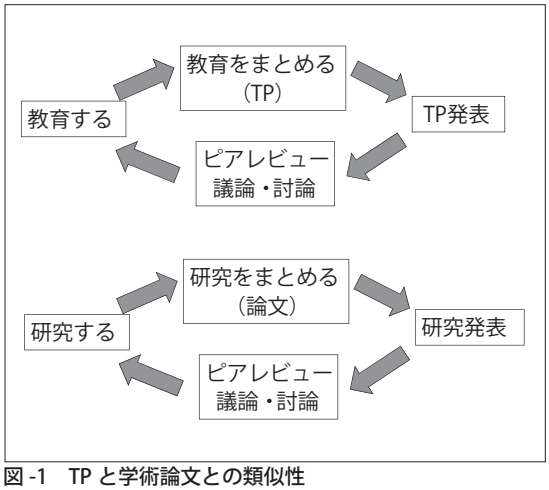

図 -1　TP と学術論文との類似性

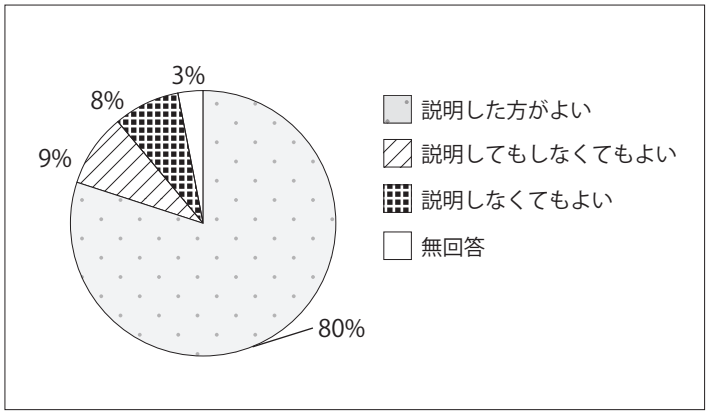

図 -2　教育理念に対するアンケート結果

主要 5 項目のうち，最も重要なのは「教育の理念」である．何らかの理念や信念がある人は強い．教育の理念が確立すれば，教員は今まで以上に気持ちよく自信を持って授業できるようになり，それは必ず良い形で学生に還元されるであろう．

とはいえ，多くの教員は教育の理念を考えた経験が乏しいため，質の高い TP を作成するためにはより深く自己省察をする必要がある．これが，TP 作成で最も重要なのは「自己省察」と「メンターとの共同作業」といわれるゆえんである．メンターがメンティーに自己省察を促すような問いかけをすることで，メンティーはより深く自己省察ができる．それゆえ，TP 作成においては熟達したメンターの存在が欠かせない．佐賀大学 TPWS でも参加者のほとんどが「メンターは TP 作成過程において大変重要である」と回答した．

現実問題として，作成に 2 泊 3 日必要な TP を学内の全教員に作成してもらうのは難しい．そこで，佐賀大学では 3 時間程度で作成できる簡易版 TP を用意しているが，そこでも「自己省察」と「共同作業」を重要視し，ペアワークを通じて作成するようミニワークを開催している☆2．

☆2　簡易版 TP の一例を以下で公開している．
https://portfolio.admin.saga-u.ac.jp/oppf/TpOpenViewAction.do?event=init&tpid=10000382

❑ TP の活用法

今のところ，大学教員は，自身の研究については研究論文という形でまとめているが，教育については同様の作業をほとんど行っていない，といっても過言ではないであろう．そのため，素晴らしい教育実践をしている教員がいたとしても，その実践・方法が教員間で共有できない．また，優れた教育実践をしている教員が評価されにくい．TP は教育業績についての厳選された記録なので，これらの問題を解決するものとして期待される．ただし，TP を教育の情報共有，教育改善に結びつけていくには学術論文と同様に TP を公開する場を設ける仕組みが必要となる（**図 -1**）．しかしながら，2012 年 6 月末日時点で，全国的に TP 披露会が実施されたのは 2011 年 11 月に開催された「ティーチング・ポートフォリオの導入・活用シンポジウム 2011 in 佐賀大学」だけである．

一方，TP は教員間だけでなく，授業にも使う，ということも考えられる．筆者は，担当している講義で自身の教育理念と方法を説明している．これにより，学生は教員の考え方を知り，教員へ対する心構えができると期待できる．実際，履修者延べ 143 名に対し，記名式で「教育理念・方法について説明することをどう思うか？」と質問したところ，80％の学生が「説明した方がよい」と回答した（**図 -2**）．

また，教員公募の際に TP の提出を求める取り組みも佐賀大学全学教育機構では行われている．

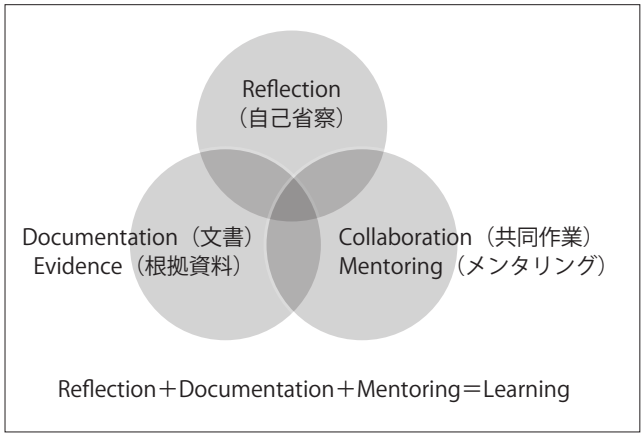

図 -3　LP のモデル（文献 5），p25 より）

以上，簡単に TP について述べたが，より詳しくは文献 3）や拙著（文献 4））をご覧いただきたい．

ラーニング・ポートフォリオ

❑ LP の構成

LP については，国内でもすでに多くの大学で導入が進んでおり，そのほとんどが Web ベースのものである．しかし，LP の内容は各大学でまちまちであり，中にはポートフォリオというよりログあるいは CMS（Course Management System），LMS（Learning Management System）と呼ぶべきものが含まれている．ここでは，定評のある LP として文献 5）に基づいた LP を紹介する．そこでは，LP の構成は次のようになっており，LP モデルとして**図 -3** が提示されている．

1. 学習哲学（なぜ学ぶのか？　学びの目標は何か？　学んだことをどのように応用するのか？）
2. 学習業績（何を達成したのか？）
3. 学習根拠資料（学習した成果・作品は？　学習業績の証拠は？）
4. 学習アセスメント（何をどのように学んだか？　その根拠は？）
5. 学習の関連付け（学習したことをどのように活かしているか？）
6. 学習目標（何を達成したいか？　学習を高め，学んだことを応用するための方策は？）

こうみると，LP も TP と構成が似ていることが分かるが，これは文献 5）の LP が文献 3）の TP に基づいているからである．そのため，この LP でも大切なことは TP と同じく「自己省察」と「メンタリング・共同作業」である．学生は，自身に，「なぜ学ぶのか？」，「学習したことを何に活かしたいのか？」，「今後どのようにしたいのか？」などと問いかけながら，学習プロセスを振り返る．振り返り過程では，学生が独りではなく，お互いに協力，あるいは教員と対話しながら，より深く自己省察をすることが大切である．こうして作成された LP であれば，学生も教員も学生の成長が実感でき，卒業後も活用できる LP になるであろう．

❑ 佐賀大学の LP

文献 3）の TP と文献 5）の LP が似ているため，佐賀大学では，TP の定義 [1] の「教育」を「学習」に置き換え，LP の定義を「自らの学習活動について振り返り，自らの言葉で記し，さまざまな根拠資料によってこれらの記述を裏付けた学習実践について厳選された記録」としている．そして，「ポートフォリオ学習支援統合システム」と呼ばれる Web システムを構築し，学生はこのシステム上で LP を作成していく．また，LP においても自己省察が大切なので，チューター（担任）制度を取り込んで運用している．具体的には，学期ごとにチューター面談（**図 -4**）が行われ，チューターは，学生が LP に入力したデータをもとに，学生の自己省察を促す．そして，学生は，「学習業績」，「学習根拠資料」，「学習アセスメント」，「学習の関連付け」などをもとに当該学期の自己評価を行い，次学期の「学習目標」を設定する．さらに，多くの学生は「学習哲学」を持っていないので，チューターは機会があるごとに「なぜ学ぶのか」といったことを問いかけ，「学習哲学」を導けられるように支援する．

この「ポートフォリオ学習支援統合システム」は 2011 年度入学生より本格的に運用を始めたが，2012 年 6 月に 2011 年度入学生 281 名に対してアンケートを実施したところ，「LP はチューター面談

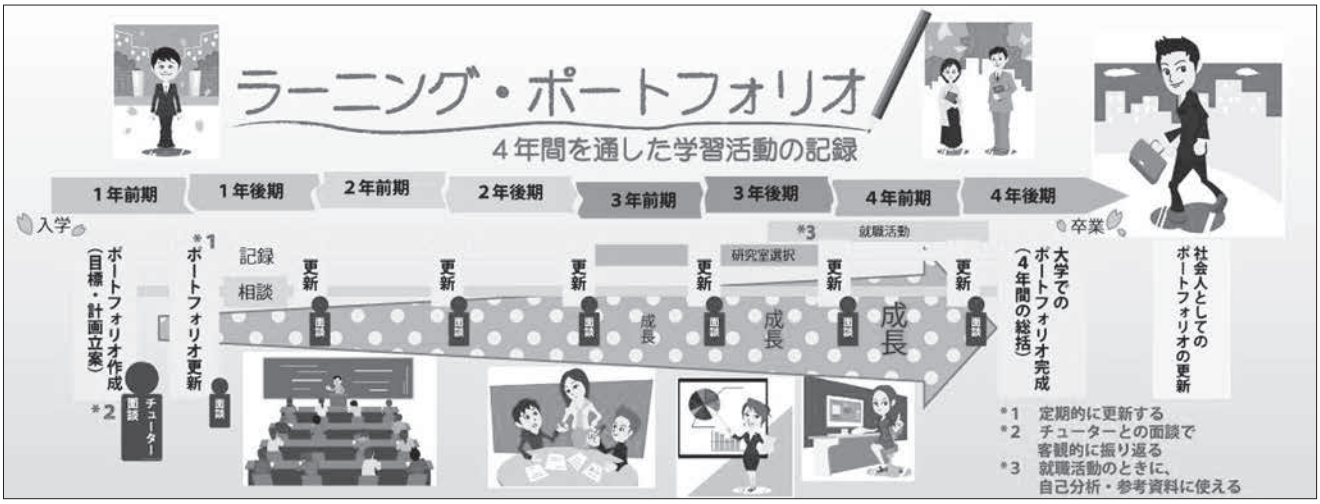

図-4　LPの流れ

で活用されているか？」という質問において，「活用されている」あるいは「やや活用されている」を合わせて44％にとどまっている．しかしながら，「活用されている」と回答した81％の学生が「LPをチューター面談で活用することで学生生活および学習への取り組む意欲は向上していますか」という問いに対し，「向上している」あるいは「やや向上している」と回答しており，チューター面談の大切さ，ひいては自己省察の重要性が窺える．

TPとLPの今後

TPもLPも教育改善の道具として期待されるものではあるが，ツールの1つに過ぎないので，過度な期待は禁物である．もしも，TPやLPを全学的に導入するのであれば，最終的には学生，教職員，大学すべてにとってメリットがあるような環境作りが大切である．また，TPもLPも広く普及していけば，必ず質の問題が生じる．このうち，TPについては，栗田らを中心にTPWSやメンターの要件をまとめている最中である．LPについては質を議論する段階にも来ていないのではなかろうか．

いずれにせよ，日本においては，TPもLPも導入されて日が浅く，実際に大学教育現場で効果が現れるにはもう少し時間が必要である．

参考文献

1) 栗田佳代子（企画）：パンフレット「ティーチング・ポートフォリオってなんだろう？」，大学評価・学位授与機構（2012）．
2) 栗田佳代子：日本におけるティーチング・ポートフォリオ―導入の意義と可能性―，スライド，ティーチング・ポートフォリオの導入・活用シンポジウム2011 in 佐賀大学（Nov. 2011）．
3) ピーター・セルディン著，栗田佳代子訳：ティーチング・ポートフォリオ作成の手引き，大学教育を変える教育業績記録，玉川大学出版部（2007）．
4) 皆本晃弥：大学教員の教育者としての業績記録　ティーチング・ポートフォリオ導入・活用ガイド，近代科学社（2012）．
5) Zubizarreta, J. : The Learning Portfolio : Reflective Practice for Improving Student Learning, 2nd edition, Jossey-Bass Higher and Adult Education (2009).

（2012年6月30日受付）

皆本晃弥（正会員）　minamoto@is.saga-u.ac.jp
佐賀大学・知能情報システム学科准教授．2007～11年同大学・高等教育開発センター併任教員，ポートフォリオ開発部門長を2年間務める．